

こどもの感性と創造性を育む

五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発

代表者: 鈴木 光男(聖隷クリストファー大学社会福祉学部 教授)

協力者: 坂田 芳乃(アルテ・プラーサ 代表)・住 麻紀(アルテ・プラーサ アーティスト)・松井 晃子(アルテ・プラーサ アーティスト)

木村 由美子(三島市文化振興課 主幹)・渡部 碧唯(清水町社会教育推進係 主事)・藤田 雅也(静岡県立大学 准教授)

島口 直弥(浜松市美術館 指導主事)・寛 有子(浜松学院大学 准教授)

【経緯】 こどもは視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚といった五感を駆使して、自らの世界を認識し、さらに出会う世界を広げていく。DX化が進展する社会では、触れなくても触れたように感じる間接的な体験が増え、直接触ったり、聞いたりすることによる感覚を意欲し、さらに磨く機会が減少している。目・耳・手に触れ感じたことを豊かに表現することで、こどもの感性と創造性はさらに磨かれていく。アートを軸に革新的な教育を展開するレジジョ・エミリアの幼児学校では、五感をもとに音・光・色・素材・香りに視点を当てた美的経験を組み込んでいる。このようなことから、県内各地で活用可能な「こどもの感性と創造性を育む美的経験によるアプローチ」に取り組み、こどもたちが遊ぶ感覚で美や美に類する価値を経験し、こどもならではの表現を展開する機会を創出したいと考え本事業に取り組みだものである。

【概要】 2021年アルテ・プラーサ (以下、アルテ) 主催「見えないものをみる 水の音をかたちにしちゃおう」ワークショップ動画をベースに「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者とともに開発する研究会を設置し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施した。ここで得られた知見をもとに、2022年度はさらに県内各地域に根差した様々な美的経験を軸としたこども向けアートプログラムを開発し、アーティストや保育・教育関係者と共に実践しようとしたものである。

【実施報告】



アルテ関連 アート寺子屋

「みて、きいて、さわって、つくっちゃおう」

①開催日: 2022年10月16日(日)10:00 ~ 16:00

②会場: ヴァンジ彫刻庭園美術館 屋外庭園

【第一部】

講師: 渡川智子 (ヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員)

屋外彫刻作品4点の触察と鑑賞ワークショップ(視覚と触覚を活用する《触察と鑑賞》による身体のさまざまな部位を使った作品鑑賞)

【第二部】

講師: 藤田雅也 (石の彫刻家・静岡県立大学短大

部こども学科准教授)

石を素材としたワークショップ(石板、玉石等に出会い、自らの表現を考えるワークショップ)

学校関連①静岡県立浜松みをつくし特別支援学校

「シャッターアートプロジェクト」

①派遣アーティスト: 鈴木海斗 (Golden Junk

代表アーティスト・造形作家)

②協力者: 内山将 (有) 宣美代表取締役)

こどもたちや先生たちの願いを集約し、アイデアスケッチをもとにデザイン案を作成するところまで進めることができた(右図)。

学校関連②磐田市立磐田第一中学校

「合唱コンクール 歌唱披露」

①開催日: 2022年11月9日

②磐田市民文化会館「かたりあ」

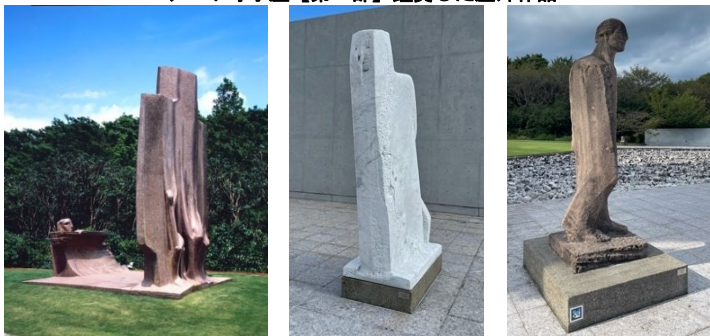
③派遣アーティスト: 本多厚美 (ふじのくに観光大使・メゾソプラノ歌手)

生徒たちに歌声を披露していただいた。



シャッターアートデザイン案

アート寺子屋【第一部】 鑑賞した屋外作品



左上《層になった木を眺める人物》
左横《くつろぐ男》
中上《顔に手をやる女》
右上《後ろ手に立つ人物》

アート寺子屋【第二部】 具体的なこどもたちの取り組み事例



石を積み行為から生まれた風景

石を割る行為から生まれた表現

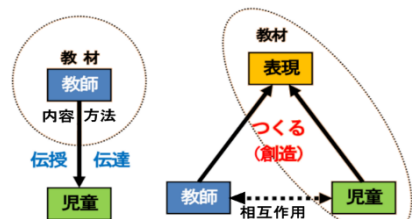
石を塗る行為から生まれた宝石

石を並べる行為生まれた文字

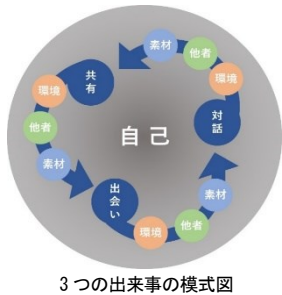
石に描く行為から生まれた表現

石を磨く行為から生まれた器

第二部のワークショップでは、《出会い》《対話》《共有》の3つの出来事の往還によって、自分なりの見方や感じ方、考え方を働かせながら、表現したり鑑賞したりする活動を展開した(右図)。



伝授型と創造型の学習モデル (佐伯「双原因性感覚」をもとに鈴木作成)



【事業の成果と課題】

保護者からは、参加したこどもたちの満足感のもとになった「何もつくらなくてもいい」という「寄り添う大人」の構えを評価された。普段の学校生活などで「いいことを発表する」あるいは「上手につくる」という意識が知らず知らずのうちに醸成され、こどもの感性や創造性に蓋をしまっているところがある。今回のような対話型の鑑賞や石という素材に身体を通して関わり、その行為そのものの意味を省察していくことが、アートプログラムを開発していく上では重要な視点であろう。これは学校連携事業においても同様である。このような視点が明らかになった点が何よりの成果と言える。

左図は、伝授・伝達型の学習モデルと、佐伯の「双原因性感覚」に立った創造的な学習モデルを筆者なりに作図したものである。造形ワークショップの内容よりも、アートプログラムの進め方よりも、先ずは大人とこどもが相互作用し合う関係性になることを大切に今後のアートプログラムやワークショップの展開をしていく所存である。

★本事業・研究に関する論文は、右QRコードよりダウンロード⇒



鈴木光男・坂田芳乃・渡川智子・藤田雅也・寛有子
「五感を活かしたアートプログラムの検討: 触覚・視覚を主とした石を素材にしたワークショップの実践から」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』第21号, 2022.